

浄土

1992-3

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三二五号
平成四年一月二十五日印刷 平成四年三月一日発行
第五十八卷 三月号





三月の秀句

老の寝の浅かりけるが春の朝

富安 風生

春昼や廊下に暗き大鏡

高浜 虚子

春の暮鴉は両翼垂らしとぶ

山口 誓子

三月号



行往座臥寝てもさめても持念する
に、その便り過（とが）なくして、
その器を嫌わず、ことごとく往生
の因となること疑いなし。

——『念仏大意』

目次

二連 載二

生も死も悦べる世界四……………須藤隆仙……(2)

一法 話一

涅槃 ① ……………藤原円忠……(9)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話) [11] 六阿弥陀詣 ……………(18)

《読者のページ》

観音さま（上）……………上野浩……(19)

季語やぶにらみ (21)

……………木下隆一 ……(25)

壬申の年(1)

表紙絵 小林治郎画

生も死も悦べる世界(四)



須^す藤^{どう}隆^{りゅう}仙^{せん}

(函館市称名寺住職)

起こし難き道心

手足がなく、その上、人の幾倍もの災難に遭いながら、強く強く生きていく中村久子さんの話をまだ続けますが、久子さんは伊藤証信先生のお導きなどもあって、お念仏の信仰に入られます。

興業界と絶縁してからは、専ら身障者の母として、とくに戦後はその不自由なお体で、常人以上のスケジュールで講演旅行などをなされました。お念仏信仰はますます深まるば

かりで、次のような歌を詠んでおられます。

合掌^{おが}みつつけふも粉食いただきぬ生きらるる身の幸をおもひて
いらだちしおのが心をおさへがたくなむあみだ仏なむあみだ仏
いらだちのあとに心をかへりみてみ仏の前にぬかづきまつる
もえさかるこの煩惱をいかにせむただみ仏のみ手のまにまに
み仏のみ手のまにまに生きゆかん宿業^{かもに}せおひし母娘にしあれば
み仏にささげまつりし白菊の香りとどむる朝の誦経に
み名となへみ名となへつつ罪ふかきわれをみつむるま夜中の床に
手足なき身にしあれども生かさるいまのいのちはたふとかりけり
手はなくとも足はなくともみ仏のそでにくるまる身は安きかな

中村久子さんのこのような歌を拝読しますと、私はものを生かす世の中の力の不思議
というものを驚嘆せずにはおられません。久子さんは勿論ご自分の大変な大変なご努力、

人のまねのできない強靱な生きる力、逞しい不屈の心によってこのようになられたのですが、しかし、久子さんの自らがお詠みになっておられますように、その底といえますか、背後といえますか、そこには既に何ものかが、生かしてやろうとして懸命になっておられるのを強く感じるのです。久子さんは自らを無にして、その力にすっかり自己を投げ入れてしまわれて、そこに、宇宙の生かす力と、久子さんの無になつての歩み行きとがピッタリと一致して、このような素晴らしい生活が開けてまいったと、こう考えざるを得ないものであります。

久子さんには幾冊かの手記があり、また別の方が書かれた伝記がありますが、それらを拝読しますと、不思議とより思えないことがいっぱい書かれてあります。例えば悪い興行師何人かを相手にして、手も足もないこの女性が長い長い時間談判し、ついにしたたかな悪党興行師たちが負けるとか、久子さん自身も結核におかされる（前号で久子さんの二度目の夫の病気を腸ガンと書きましたが、腸結核の誤りでした）こともありました。医者が絶対にダメだというのに、久子さんはニンニクをどんどん食べてこれを治すのです。もうこうなつてくると、人間は自力だけではない、自力の窮極に他力が出てくる、私がこんなことをいっては生意気ですが、久子さんがそのことを教えて下さっているのであります。

久子さんのような例は他にもございます。狂った養父に両手を切斷され、やはり興業の

世界に入り、のち尼さんになって多くの人々に光明を与えた大石順教尼などもそうでありますし、外国ではかの有名なヘレン・ケラー女史がおられます。ヘレン・ケラーさんが日本に來られたとき、久子さんが日本代表で自作の人形を贈られ、双方大感激だった話はよく知られております。

さて、このように、人間は逆境に遭えば遭うほど、生かしてくれる力、救済してくれる力というものが分かってくる、これが尊いのであります。それこそ宇宙の救済して下さる意思といったようなものが分かってくる、それが南無阿弥陀仏であります。ご本願であります。

このご本願が分かりますと、求道の心というものが自然に湧いてくるのです。それがまた法然上人の仰せられる「起こし難き道心」というものであります。

ところで「道心」などといえ、何か私たちは、大変な決心、水盃でもして出発するような大層なことを考えがちですが、浄土宗ではそんな面倒なことを教えていないはずであります。

法然上人は「どうしたならば道心が出てくるか」との問いに対して、次のように答えておられます。

「そのよう一つにあらず。あるいは人の苦に会うを見て三途さんずの苦を思いやれ。あるいは人の死ぬるを見て無常の理ことわりを悟れ。あるいは念仏してその心を励ませ。あるいは常に善き友に会いて心を恥しめられよ。人の心は多く悪縁によりて悪心あしきの起こるなり。されば悪縁をば去り、善縁に近づけと言えり。これらの方法ひとしおならず。時にしたがいてはかろうべし」(『十二箇条問答』)

また、「仏道修行は、よくよく身をはかり、時をはかるべきなり」(『念仏大意』)とも仰せられておられます。つまり、よく自分というものを考え、社会というものを考えていれば、道心は自然に湧いてくるというものであります。

この湧いてくる道心(信心)が大切なのであります。法然上人のお弟子の親鸞聖人などは、その湧いてくる道心(信心)は、自分のものではない、それは如来様の心であって、如来様が下されたのだと言われました。教義の上で、それ故に親鸞は絶対他力で、法然は半自力半他力だなどと言まらぬことをいう方がおりますが、これはとんでもない間違いであります。両者別々のことを説いておられるのでは勿論ないのであります。

理屈っぽくなりますので教義論的なことは省きますが、発達してきた大乘仏教では、すべてにみな仏性(仏になる種)ありとするのであります。道心といったようなものも、そこ

から出てくる。だからその点からいえば如来様から確かに頂いたものであります。しかしそれはただ黙っていたのでは出てこないのです。縁というものが大切であります。ですから真宗のほうでも、その本願の話といったようなものは善知識（信仰上の善い先生）からこれを聞いて、そして信仰に入るものであるといっているのであります。

法然上人は、それらをも含めて「善縁に近づけ」と仰せられています。人様の苦を見て、人様の亡くなるのを見ても、それが道心が起る機縁となるのです。また善き友に会ってもそれも機縁になるのです。善き友とは即ち善知識であります。そして法然上人はさらにここに、「念仏してその心を励ませ」と教えておられるのです。念仏によって、ご本願がますます分かるわけです。道心がますます深くなるということです。

道心が仏様からの賜わりものだという教えも、これは何も親鸞聖人のご発想ではありません。中国で浄土教をお弘めになられた曇鸞大師どんらんという方が、このことを既にちゃんと教えておられるのであります。

ただし法然上人はこのことを表面立てては仰せられなかったわけです。道心というものは念仏さえ称えれば自然に具そなわると教えられたのです。だから道心の有無だけを論じてはいけないとまでいわれたのであります。

つまり法然上人における信心の正しい姿というものは、道心も自然に出てくる、自然に

深められていく、それは一切の機縁によつてそうなり、その機縁は念仏になつて現われてくる、というのであります。

浄土宗では深い信心を三種類にみて、これを三心さんじんといいますが、法然上人はその三心について、「人目をかざらずして往生の業（念仏のこと）を相統すれば、自然に三心は具足するなり」と仰せられ、「たとえば、葦あしのしげき池に十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたりとも見えねども、よくよく立ち寄りて見れば、葦間を分けてやどるなる。忘念の葦はしげけれども、三心の月はやどるなり」（『諸人勸化の御詞』）とお示しになられ、池の葦の間の小さな水面にも月がやどり映うつるように、念仏の心に自おのづと信心は現われてくると教えられておられます。

このようにして、浄土宗という道心というもの、信心というものは、自然に出てくるものでなければならぬ。どう自然に出てくるかという点、先には機縁による。次には念仏によつてさらに深められていく、ということでありましょう。

ですからそれは言い換えれば、ものの見方の転換でもあつて、これまで気のつかかなかつたことが分かつてくるということで、法然上人はそれがあるのだと仰せられたわけでありませう。

涅槃 (下)

前号に続いて「涅槃」ということについて考えて見たいと思う。

ニルバーナ、漢字に直して、「涅槃」という言葉は、それ自体幾つかの意味をもっている、どう訳すべきかむつかしい



藤 ふじ
原 わら
円 えん
忠 ちゆう

(市原市無量寺住職)

らしいが、何しろ古い時代の言葉なので、動詞の前後に文字が付いたものか、名詞の合成語なのか、という問題もあるらしく、それぞれの見方から訳すと、「吹き消された」「香りを出さない」「行かない」

の三通りの意味の内の、どう判断して訳すのか、「織らない」と訳すのか、「繁った林を出た」と訳すのか、「後有なし」と訳すのかという疑問が生ずるらしい。

大変に方向のちがった意味を持っている様だが、解釈の仕方、根っこの方で一つにつながって行くのである。

例えば、「吹き消された」というのは、煩惱(迷い)の火が吹き消された事で、煩惱を焼き尽くす、と表現するのと真意は同じという事である。「香りを出さない」とは、人間が際限なく欲に追い立てられ、怒り憎しみ愚かさの固まりとなって穢なくて臭い状態から、煩惱を捨てて事に

よって穢なさも減り臭さも無い状態になった、という事である。

「行かない」とは、一切のこだわりを捨てて見れば、総てのものは本来、不去(去ることも無い)不来(来ることも無い)と観ずる事が出来て煩惱の制約から開放される、という事である。「織らない」

とは、人間は、縦糸と横糸で布を織る様に迷いを織り広げて行くものだが、煩惱を消し去ることで、これ以上迷いを織り広げることは無い、という事である。

「繁った林を出た」とは、人間の煩惱が盛んに繁って、人の本来進むべき方向が見えなくなった状態だから、煩惱を離

れることで、人の進むべき方向が見える状態になったという事で「後有なし」とは、煩惱によっていろいろな迷いや束縛を受けるこの世の生が終わった時には、再び迷いの世界に入る事の無い状態まで修行が行き届いている事である。

こうして見ると、どの訳をとつても、迷いから迷わない方向へ向う意味をもっているようだ。そしてその中でも「吹き消された」が最も適切な訳らしい。

又この涅槃という状態を形容する言葉が沢山に生まれたようで、次に列挙して見ると、円寂、大円寂、無生、無出、無作、無為、帰依、窟宅、解脱、光明、灯

明、彼岸、無畏、無退、案処、寂靜、無相、無二、一行、清淨、無闇、無礙、無諦、無漏、広大、甘露、吉祥、無下、不同類、断などと「涅槃」の状態を形容したりしている。それは、お釈迦様から教えを受けた弟子達やその又弟子達と続いて、修行を専らとする僧達の憧れが涅槃という状態であつて、いろいろな誉め讃える言葉をもつて、憧れの心を表わす事が多かったからであろう。

お釈迦様は、哲学、禪定、苦行、と修行を重ね、この修行が間違ひであつたと認めて、瞑想の中で、心の中に忍び入ろうとする悪魔の誘惑と戦つて、この誘惑

に完全に打ち勝ったその時を以って「涅槃」の境地に入られたと解することが出来るだろう。

更に心の中の疑問を一つ一つ追及して続けて遂に無明は消え、智慧が湧き出ずる様に生じられた、という。

浄土宗では、「高祖」と仰ぎ、浄土宗のお寺では本尊様に向って右側におまつりする善導大師は、中国の安徽省泗州に生まれた。幼い頃に出家して、法華経や維摩経を勉強修行されたが、後に浄土の教えを求めて修行された方である。二十歳の頃山西省太原にある玄中寺というお寺に道綽禪師という高僧を訪ねて「私

は阿弥陀仏のお浄土に生まれることが出来るでしょうか」と聞くと、道綽禪師が答えるのに、「二つの蓮の花をお供えし、念仏を称えながら仏様の周りを歩き続け（行道）なさい、もし七日間蓮の花が萎まなかったら必らず極楽浄土へ往って生まれるでしょう」と仰せられた。

そこで善導大師は仰せの通りに七日間念仏行道を修したが、蓮の花は少しも萎まなかった。これにより、今までの勉強や修行では消し切れなかった総ての迷いは吹き消えて、念仏に精進したところ、生きていながら極楽浄土のありさまが目に見えた。そして至心に念仏を称え続け

ると、口から光りが出たり口から小さな
仏様（化仏）^{けぶつ}が表われたりして、神聖に
して特異な現象（三昧）^{さんまい}を顕わす程になっ
たと伝えられ、善導大師入寂の後、弟子
が建てた大師の記念碑には、「三昧大徳
善導阿闍梨」^{あじやり}と刻まれている。

石碑であるからいろいろな人の目にふ
れたであろうが、善導大師が三昧の境地
に入られた坊さんだったという事に多く
の人々も疑いを持たない程に尊敬されて
いたのであろう。私は善導大師の千三百
年忌のお参りに中国を旅して西安市で沢
山の石碑を集めてあるところでの石碑
を拝して来たが、大きな石碑で高さ約三

メートル程あった様に記憶している。

石碑の事はとも角として、善導大師は
玄中寺で道綽禪師の教えに従った七日間
の念仏行道の中で涅槃を感じ得られた、と
受け取るべきであろう。

日本で浄土宗を開いた法然上人は、長
承二年（一一三三）に岡山県久米南町に
生まれた。法然上人の父は武士等を指揮
して治安の維持をはかる地方長官だった
が、同じ地方にあった堀川天皇の荘園を
管理する武士の集団から突然に夜襲され
深手を負われた、その時、法然上人は深
手を負って死期近い父から、「敵をうら
むな、仏道修行の道を進め」と遺言され、

遺言に従って仏道修行の道に入り、十三歳から四十三歳まで京都比叡山で修行、その間あらゆるお経をすみからすみまで何回も学び直し、深くて広い智慧第一の法然坊」と呼ばれたという。

最初に学んだのは法華玄義、法華文句、摩訶止観を中心とした勉強修行であつたというが段々と浄土の法門に心引かれ、承安五年春に先に述べた善導大師の書かれた書物の中から「一心に専ら阿弥陀仏の御名を称え、起きても寝ても時間の経過にもかかわりなく、阿弥陀仏のお救いを信じ続ける者は、これを仏の指定された正しいあり方の中に入つた者と言え

る、何故なら、そういう事は阿弥陀仏がお求めになつてゐる事に合致した方なのである」という一文が心の中に光明をさし込んで、この救いに頼る他に道なし、と心中の確信が高まつたと伝えられる。今までの人も驚く程の勉強修行は無い用なものであつたと踏んぎりをつけられた心境を法然上人は、「永年をかけて、いろいろなお師匠さんや仏教書から学び、修行してお覚えた智慧は『必らず御仏のお浄土に往生する』為には何ら力にならなかつた」と後にいわれているが、法然上人にとつてはこの時が涅槃を感得された時期であらう。

出逢いというか、大事な契機に大事な事であると気付いて、その出逢いを生かすことが出来るかどうかは、その出逢い以前にどれだけ真剣に求め続けてきたか、という経過の影響もあるのであろう。東京にある浄土宗大本山の増上寺の御法主をなされて、学者としても名高かった椎尾弁匡大僧正は、「偶然の必然」という事を教えられたという「私達の一息一息も天地と相通するものがあり、天地一切のお力がまとまって今の一息となった。その一息は偶然でなく、厳然たる必然、事実である。偶然と思われる事を偶然と捨てればそれまでだが、その偶然に

必然を見出す。そこに力強い信仰を体得する事が出来る」と出逢いの大事さを教えられたという。

お釈迦様が瞑想の中で感得され、善導大師は七日の念仏行道で感得され、法然上人は善導大師の書かれた文に逢つて感得されたのも、偶然としてでなく必然として受け止めて、その境地を完成され更に新しい働きかけへと能動的に踏み出された軌跡は誠に有難いものである。

浄土真宗の祖親鸞聖人のお言葉に、「私が念仏を信ずるのは、念仏として阿弥陀仏に助けられなさい、という法然上人の仰せになった事を信じるほかに別に

細かい理由はない——例えば法然上人に騙されて地獄におちても少しも後悔はしない」という意味のお言葉があるが、迷いを吹き消した事から生まれ出る強さを見せつけられる思いがする。

古来仏教の先師達は、涅槃をいろいろな状態で示されていると思う。そのいずれもが涅槃であるに違いない。

勿論仏教の最高極致の涅槃はまぎれもなくお釈迦様のそれであるが、お釈迦様は印度のブッダガヤで涅槃を感得され、涅槃の中に生きて多くの人々を導かれたのである。しかし、肉体の束縛はそのままだに残っておられた。スリランカのポロ

ンナルワという地に一つの石山を彫り出してお釈迦様の座像、立像、臥像をまつところがある。臥像は右脇を下にして寝たお姿の十三メートル以上の大きなお像である。右足先と左足先が揃っていない。今正に入滅されようとしているお姿だというが、「お釈迦様ですから、肉体の束縛のある内（生きている内）は両足先をそろえた、完全なリラックスを得られない」事を表しているという。

そのお釈迦様は肉体の滅びた後に仏法をこの世に生かし残されて、法力不滅の大涅槃に入られた、と私は受けとらせて頂いている。

（了）

◎ “維持会員”へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十八巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもつて、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰會

六阿弥陀詣

勝 崎 裕 彦

彼岸会にまつわる習俗として、江戸を中心に六阿弥陀詣ろくあみだもうでがかつてはよく行なわれていた。彼岸の一日に、六カ所の阿弥陀如来を順次巡って参拝することで、西方極楽浄土へのはるかなる祈りと願いをこめて、江戸の庶民は、半分は遊山参りの楽しさで、諸寺を巡拝したのである。その起こりは、行基菩薩の作と伝えられる一木六体の阿弥陀如来を安置する(一)豊島元木の西福寺、(二)下沼田の延命院、(三)西ヶ原の無量寺、(四)田端の与楽寺、(五)上野広小路の常楽院、(六)亀戸の常光院の六阿弥陀

をお参りすることにはじまったという。江戸中期の頃のこと、この六カ寺をとくに江戸六阿弥陀といつて、とりわけ尊崇されたのである。後に、西方六阿弥陀、山の手六阿弥陀、玉川六阿弥陀、総州六阿弥陀などが創始されて、昭和初期まで続いていた風習であった。

野の道や梅から梅へ六阿弥陀(子規)

きびしかった冬の寒さが過ぎて、ようやく春の陽光があふれる頃、菜の花が咲き、雲雀さえずる野辺の道を、信心を確かめることに加えて、願ってもない行楽の折としたものであろう。私は、六波羅蜜の実践を六阿弥陀参りに重ね合わせて、近隣の山の手六阿弥陀の諸寺院(東京教区城西組)をお参りしよう。

数珠ひとつ六阿弥陀参りの散歩道(裕彦)

観 音 さ ま (上)

うえ
上

の
野

ひろし
浩

私共は現在、私共の住むすぐそばの地で、慈愛あふれる観音に巡りあうことができるし、全国何れの土地の寺を巡っても観音をお詣りすることができる。また街を歩いても、その四つ角や路傍に観音を見ることができし、原野を行っても観音に会うことがある。それほどわが国には慈悲の菩薩である観音の姿が多い。このことは私共がいかに観音に対する信仰の深いかわしめすものだといってもいいであろう。

しかし私共はこの多くの観音について、その出現の源、歴史、その性格、そしていかなるご利益を私共に与えてくれるのかなどについてはあまりこれを考えもせず、ただ夢中になつて信心をしているのが実情ではないであろうか。そこでわが国のほとけとして最も多

くの信仰をおさめている観音についてその本質をさぐってみるのも、また無駄なことではあるまいとおもう。

観音

観音はまた観世音菩薩とも呼ばれ、その他のいろいろの呼び名がある。観世音菩薩は特に大乘佛教のうちで最も重要視される佛として特に菩薩の名で呼ばれる。

観世音菩薩信仰の起源はインドにおいては明らかではない。おそらく中央アジア方面、あるいは西アジア方面で発生したものと考えられており、西暦紀元前一、二世紀のころにはすでに興ったものではないかといわれている。そして中国においてはこの佛の信仰は、

西暦紀元一世紀のころすでにあらわれはじめた。

さて、わが国に観音崇拜の思想が伝わってきたのは推古天皇の時代で、この佛の信仰を鼓吹したのは聖徳太子であったといわれる。ついで空海が密教を将来して後は、観音信仰がいよいよさかんになり、花山天皇のときには西国三十三ヶ所の観音霊場を人々が巡礼するという風習も生まれてきたのである。

観世音菩薩について説いた佛教經典も数多いが、そのうちでも根本的なものは妙法蓮華經、普門品であり、これがいわゆる観音經である。そもそもこの佛は、女性の神格が佛教にとりいれられて佛となったものといわれている。普通、この佛は阿弥陀如来の、左方の、脇侍としているものが多く、人々に対しては

慈悲の心をあらわしているのである。さらにこの佛は人々のいろいろな悩みをききとどけてくれる佛として、世人から最も広く崇拜されている。またその利益の特徴は、私共現世の人々に対してその福利利益を授かる佛となった。すなわちこの観音が如来の名をいただかず、菩薩の名に甘んじているのは、未ださとの修行が足りないためではなく、今生において人々の現世利益をきくためであるといわれている。

したがって観世音菩薩は、現世に生きる人々の願いことは何なりともきいてくれる佛であり、すなわち千差万別の願いことをききとどけてくれるので、人々の願いごととも往々にして身勝手なものが多くなってきた。そこで観音はこれらの願いごとをききとどけるた

めには、ただ「観音」といったばかりでは、はつきりせず、いわゆる分業の形をとらなくてはならなくなったので、この佛はその身を分割するに至ったのである。

はじめに現われた観音の分身は、六つの観音、または七つの観音であった。これらの観音とはすなわち聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、如意輪観音、准胝じゆんてい観音の六観音、あるいは准胝ふくろうけんじやくのかわりに不空羅索ふくろうけんじやく観音を入れて六観音とする。また七観音とは聖、千手、馬頭、十一面、如意輪に准胝と不空羅索を入れて七観音とするのである。

さらにこれにあきたらず、観音は衆生の願いをきくために三十三観音の分身までに発展する。この三十三観音の信仰は、人々の観音信仰の流布とともに、主として民間で信仰さ

れていたものである。諸種の観音を、經典に述べる観音の三十三身説にもとずいて三十三種集めてもので、江戸時代の中期以後にあらわれたものである。

法華經普門品によれば、三十三観音の佛名が述べられているが、今はそれを省略して、現在民間で信仰されている諸種の観音名をあげてみることにしよう。すなわち次のごとき観音をいう。楊柳、龍頭、持経、円光、遊戲、白衣、連臥、瀧見、施薬、魚籃、徳王、水月、一葉、青頸、威徳、延命、衆宝、岩戸、能静、阿耨、阿摩堤、葉衣、瑠璃、多羅、哈剎、六時、普慈、馬郎婦、合掌、一如、不二、持蓮、灑水の各観音である。

そしてこれらの観音のうち、青頸観音や葉衣観音のようにインド起源のものもあれば、

揚柳観音や水月観音のように明らかに中央アジア起源のものもあり、中国起源の馬郎婦観音もあれば、わが国での起源と考えられる瀧見観音もあり、また中国で観音信仰の中心となつた白衣観音もある。

さて、それでは個々の観音の実体はどうであらうか。ここにおいては六観音、七観音を中心として述べてみよう。

聖観音

聖観音は梵名アーリヤリヴァローキティシュヴァラといい、漢語では阿唎哪婆路枳帝湿縛羅と書く。聖は聖者の意味で、菩提の通

称である。この観音は他の多くの観音の根本となるものであるから特に聖観音と呼ぶ。聖観音の「聖」は「正」とも書く。私共はこの観音のことを、一般に呼ばれる観音と考えていいのではあるまいか。

この観音の姿をみるに、必ず一面二臂で、相好は円満である。変態もなく、一切の如来のもつ大慈悲心を表している。その宝冠の中にほとけ一体を抱きかかえているが、これは阿弥陀如来であって、この如来をいただくわけは如来の深い思いをいだいて、これに帰依しているものという意味である。

わが国の佛像の歴史で、飛鳥時代および白鳳時代（奈良前期）に属する観音像はすべて聖観音の像である。私共に親しみの深い法隆寺の救世観音、百済観音および夢違観音など

いずれも聖観音である。

十一面観音

十一面観音は梵名アーリヤリエーカダサリムツカという。十一面をもつ姿としているので十一面観音といい、また普門の十方に向けて光放つという意味から大光普照観世音ともいう。六観音の一である。

十一面神呪経疏という經典によると、十一面観音の十一のうち、前三面は慈悲相、左辺の三面は瞋怒相、右辺の三面は白牙上出相、うしろの一面は暴惡大笑相、いただきの一面は佛面であって、各面の頭冠にはすべて阿弥陀如来の像が安置されている。そして、前三面の慈相は、善良な衆生をみて慈悲の心を生

じ、樂を与える。左三面の瞋相が、惡の衆生をみて、悲しい心を生じ、苦を救うのである。右三面の白牙上出相は、淨業を行なう者を見て、これをほめたたえ、佛道に精進することすすめる。うしろの一面の暴惡大笑相は、善惡の入りまじった衆生をみて、にが笑いを生じ、惡を改めて善の道に進ませる。いただきにある佛面は、究竟の佛教真理を説いている。このように多面多臂の、力強い佛が出現したのは、この佛が現われる前までにはみられなかったことで、これはヒンドウ教の諸神からの影響とみられる。この觀音が現われると、觀音の変化することが急激に行なわれるようになったのである。

十一面觀音は、主に病氣退散のために祈られ、この佛の信仰はわが国では天平時代に遡

る。しかし、十一面觀音に対する信仰が病氣平癒と結びつく理由は明らかにわかつてはいない。

十一面觀音は密教においては胎藏界曼荼羅下方の第三重蘇悉地院の最北にあり、密号は變異金剛または慈愍金剛である。この佛を修すれば、一切の疫病を除くことができるという。たとえばこの佛を、六觀音と六道にあててみると、この佛は阿修羅であつて、この道にある衆生がくらやみの中で殺伐をこととしてゐるのを愍み、大光普照の姿をあらわしてこれを救済するといわれている。この觀音を本尊として息災、除病、除難のために修する法を「十一面觀音法」という。

(つづく)

季語やぶにらみ(三)

壬申の年(一)

木の
下
隆
一

(随筆家)

乱世の卦に壬申の年明けぬ

去年の暮、賀状に添える句を案じていた時、ふと浮かんだのがこの句であった。その時はまだゴルバチョフは退陣しておらず、曲がりなりにもソ連という国は存在していた。それ

が旬日を経ずして、両者とも綺麗さっぱり消えてしまったのだから、私の予言もいよいよ本物になったかと空恐ろしくなった。「乱世の卦」と半分は遊び心で言ったままでなのに、次々と新たな現実を突きつけられると、いさ

さか慌てざるを得ない。その根底には、我が国の歴史に初めて書き留められた大事件、大和朝廷を二分して、叔父と甥が政権を争った「壬申の乱」が頭にあったのは否めない。しかし、この他の壬申の年に、六〇年ごとに天下国家を揺るがすような出来事が起きているのかどうか私は知らない。これは一つ調べてみる必要があるなど、暮れもおしつまったある日、重い腰を上げて図書館へ行き、「増補版日本史年表」（東京学芸大学日本史研究会編、東京堂出版）を借りて来た。借りてはみたものの果たして役に立つかどうか、まあ暇つぶしぐらいにはなるだろうと、あまり期待はしなかった。

顧みれば、私達の世代は日本史をともに学習してないのである。中学二年の二学期、

つまり昭和二〇年八月十五日以降、国史の教科書には殆ど全ページ墨を塗らされ、いままでの国史は間違ってたと言われても、ただ戸惑いを覚えただけで、高校を卒業するまでついに日本史を教わることはなかった。だから、私の歴史観は必要に迫られて読んだ記・紀・万葉、鎌倉時代の説話集や軍記物語等々から得た知識の断片を点綴し、不明の部分は想像で補うといったかなりいい加減なもので、それも江戸の中期あたりで切れている。いわば稗史「日本史」なのである。一貫した勉強をし直せばいいのだが、どの学説に従えばいいのか見極めがつかず、そのままになっている。怠慢といわれればそれまでであるが、いつ何かの拍子に定説めいたものが覆されるやもしれず、この年になって、折角得た知識に再度

墨を塗るのはご免だという思いが、常に心の隅のどこかに蟠っているのである。

それはさておき、年表を開いた途端、はたと行き詰まってしまった。というのは、天皇家の系譜が思った以上に複雑で、神武以来の系統が二五代武烈天皇で途切れ、二六代継体天皇から別系統の天皇家が立った形跡があるからである。この辺のことは我が国最古の勅撰の正史「日本書記」——神代から四一代持統天皇までの事跡を編年体に著したもので、四十代天武天皇の命により、天皇の第五皇子舎人親王を中心し、七二〇年、四四代元正天皇の時完成した——によるしかないが、継体天皇系列の天皇家に都合よく書かれていないとも限らない。

そもそも継体天皇の出自そのものが曖昧模

糊としたもので、武烈天皇に嗣子がなかったで、一五代応神天皇の五世の孫彦主人王の第一王子を、大和朝廷の重臣大伴金村、物部麤鹿火等が越前国から招聘したとされているが、反対勢力が強く、やむを得ず河内で即位し、大和に入ったのは二一〇年も後のことであつたという。この記述の曖昧さが、後に継体天皇は朝鮮から渡来した扶余系の騎馬民族の集団の長と見做される所似でもあるが、どうやらこの説が妥当なような気が私はしてならないのである。三七代斎明天皇の治世、唐と同盟して高句麗・百濟を侵した新羅を討つために大援軍を派遣したのも、元を正せば同じ扶余の血を引く同胞を救うためという大義名分があつたのかもしれない。結局この企ては白村江に於ける水上戦で大敗したのがきつ

かけて百済は滅亡し、我が国も壬那^{みまな}を失い、長年に及んだ半島経営から撤退することになるが、この時戦渦の中から我が国へ流亡した人々もたらした文化が、その後の日本のあらゆる面に及ぼした影響は、計り知れないものがある。

話を円滑に進めるために、メモ程度の系図を左ページに作ってみたが、これが案外厄介な代物だった。古代社会では、身分が高ければ高いほど一夫多妻であつたであろうことは想像に難しくないが、この表で見る限り、異母兄弟であろうが、敏達天皇と推古天皇のように兄妹同士の婚姻、また糠手姫と舒明天皇の父押坂彦人大兄皇子との間に見られるような叔母と甥との婚姻、大海人皇子（後の天武天皇）の妃（後の持統天皇）は、中大兄皇子

（後の天智天皇）の娘で、これは叔父と姪の婚姻であるが、このような近親間の婚姻は日常茶飯のことであつたらしく、とても現代の倫理観では律しきれないものがある。

また、天皇を補佐す執政者は大臣^{おおみ}と大連^{おおむらじ}であつたが、大臣は主に内政を掌握し、武内宿祢の流れを汲む臣^{おみ}の姓^{かばね}を持つ葛城・巨勢^せ・平群^{へぐり}・紀・蘇我の五氏のうちから、最有力者が任命された。臣も連も世襲だつたから、大臣はこの五氏以外から出ることはなかつたし、大連のほうも、軍政を司る連の姓を持つ

〔左図の見方〕

◎ 天皇名の上の（ ）は即位順

◎ 左横の（ ）は在位年数

◎ 右横の傍線（—）は女帝を表す

物部・大伴の両氏以外から登用されることはなかった。

話が横道に外れたが、この程度の予備知識を備えていないと話が一向に進まないのので我慢して頂くとして、さて、壬申の年が史書に明記された最初は、五五二（皇紀一二二二）年、欽明天皇の一三年であったと言っているだろう。年表で発見した時、私は驚きの目ではばらくこの数字を見つめていた。

（イチニイ、イチニイ、仏教伝来の年か）

ふと、国民学校四、五年の頃の我に戻っていたのである。どういうわけか、あの頃はやたら歴史年表を暗記させられたが、語路がいいのでこの仏教伝来と、一休さん死す文永の役の二つは、今でもよく覚えていた。

「日本書紀」に、「百濟聖明王、釈迦金銅仏、

幡蓋、經論を献ず」とあるのが仏教伝来の根拠であるが、続けて、仏教崇拜の是非をめぐって群臣間に論争があり、天皇が試みに賛成派の大臣蘇我稲目に命じて礼拝されてみたが、当時流行していた疫病は止まず、反対派の大連物部尾輿等は異国の神頼むに足らずと、難波の堀江に仏像などを投げ棄ててしまったという話が出ている。

蘇我稲目は継体天皇の没後皇位継承で第一皇子と第二皇子が争った時第二皇子に付き、第一皇子の二七代安閑天皇を僅か四年で退位させ、二八代宣化天皇実現に尽力した功によって大臣となった人物で、蘇我氏が歴史の表に登場するのはこの辺りからである。継体天皇の出自同様に、蘇我氏のそれも極めて曖昧で、「日本書紀」の記述に従って後の史書

も大和国高市郡蘇我の豪族としているが、果たしてそうであろうか。私は蘇我氏は越前国の豪族であつたような気がしてならない。「日本書紀」が書かれた時点では確かな記録があつたわけではなし、語部の口述する伝承を書き留め、それに加筆訂正を重ねて完成したものであるから、時の為政者に都合の悪いことは抹殺したり隠蔽したりしているに違いないのである。そこで一つの仮説を立ててみた。

朝鮮半島の人々が我が国に来るようになったのはいつの頃からか定かではないが、多くは、海流の關係で出雲から越前へかけての海岸に漂着した。時代が下るに従つて、政情不安な半島を逃れて意図的に漂着する船が増えたが、大型化した船は、大陸の珍奇な文物や文化を満載してやって来て、一部は出雲国に、

また一部は越前国に定着し、それぞれ異質の文化圏を形成した。だから、大和国成立以前に、越前には大和を凌ぐ文化国家が存在したことは、十分に考えられるのである。しかし、天の時を得た大和族に機先を制せられ、中央に覇を唱える時機を逸してしまった。地の利も悪かったが、出身地が異なる部族間の人の和を得られなかったのかもしれない。虎視眈々中央を窺ううちに永い歳月が流れ、やがて武内宿祢の裔と名乗つて臣の姓を潜称する蘇我氏が力を得て越前を束ねるようになるが、傀儡として頭に戴く人物に欠けていた。そこで蘇我氏は祖国に使いして、一人の皇子を迎え入れるのに成功した。そして、鉄槍鉄甲で鎧った騎馬軍団を率いてやって来た皇子を擁して、武烈天皇の死で混迷する大和へ一

氣に攻め上ったが、大伴・物部氏の鉄壁の防衛陣に阻まれ、心ならずとも河内の地で即位を宣言せざるを得なかった。いかに騎馬軍団が強力でも、数に限りがあったから妄動することはできなかったのである。彼等は二〇年間河内にとどまって、大和の文化に馴化することに努めたが、とりわけ熱心だったのは、馬の繁殖であった。当時の最大の武器は、迅速に移動することができる馬であった。大和にはこの武器はなかった。

「日本書紀」によると、大和国の軍政を司る大伴・物部の両氏が継体天皇を迎え入れたとあるが、この記述には、軍の長たる者が恭順の意を表したにも拘わらず、なぜ一気に都へ入れなかったかという矛盾がある。これは両氏が継体天皇の即位に反対する最たる者で

あったことを暗に物語っていると考えるのが自然で、両氏は二〇年後身分保全を条件に、継体天皇の、いや蘇我氏の軍門に降ったのではあるまいか。そう考えたほうが辻褄が合う。

(続く)

竹中 信常 著

佛心凡情

定価五〇〇円 二二〇円

《発行・発売》

大 道 社

電話(〇三) 三三六二―五九四四
振替(東京) 一一八二四七

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努めています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費 一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十八巻 三月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成四年二月二十五日 印刷

平成四年三月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 南小暮製本印刷

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三（三三六）二五九四四

〒一〇三（振替）東京八〇八二一八七

◇◇◇好評の新刊◇◇◇

教訓仏教語辞典

栗田順一編 価格一六〇〇円

○仏の教えはいつも新しい！

日常用語として使っている仏教語も、その意味をよく理解してみると、私たちの暮らしに密着した教えが多い。本書はなじみ深い仏教語の意味を生活に密着したかたちでわかりやすく説いている。

（出版・発行）

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三一七 電話（〇三）三三三三—三七四一

* 浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話（〇三）三四三六—三三五一まで。

第五十八卷

三月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
平成四年二月二十五日印刷 平成四年三月一日発行